

ラジオと地域情報メディアの今後に関する研究会（第 1 回会合） 議事要旨（案）

1 日時

平成 22 年 2 月 8 日（月）17 時 30 分～19 時 30 分

2 場所

総務省 8 階 第 1 特別会議室

3 出席者（敬称略）

（構成員）

上滝徹也（座長）、石井彰、伊藤恵、入江たのし、太田滋、金山智子、芝勝徳、田中耕一郎、西田善太、舟橋洋介、三浦佳子

（総務省）

内藤総務副大臣、長谷川大臣政務官、小笠原総務審議官、山川情報流通行政局長、久保田審議官、武田情報流通行政局総務課長、大橋放送政策課長、田中放送技術課長、武居放送政策課企画官、荻原地域放送推進室技術企画官

（事務局）

情報流通行政局放送政策課

4 配布資料

資料 1 - 1	ラジオと地域情報メディアの今後に関する研究会について
資料 1 - 2 - 1	石井構成員資料
資料 1 - 2 - 2	入江構成員資料
資料 1 - 2 - 3	西田構成員資料
資料 1 - 3	参考資料

5 議事概要

（1）開会

（2）総務副大臣挨拶

- 内藤総務副大臣より以下のとおり開会の挨拶があった。
 - ・ 今回の研究会を立ち上げようと思った直接の理由は、地デジの跡地利用。特に AM や FM ラジオの事業者が移ろうとしているマルチメディア放送の V-LOW の部分について、平行移動という話があるがそれでよいのか。それでラジオの人气が回復するのだろうかという点について疑問をもっている。これから 6 ヶ月間、ラジオがかつての人气を取り戻すためにはどうあるべきか、皆様に忌憚ない意見交換していただければと思っている。そして、放送事業者に限らず V-LOW の利用を考えている方に大いに刺激を与えていただきたい。結果として、失われつつあるラジオ

の人気をもう一度回復してもらいたい、そんな思いでこの研究会を立ち上げさせていただいた。

(3) 大臣政務官挨拶

- 長谷川大臣政務官より以下のとおり挨拶があった。
 - ・ 私も子供のころに鉱石ラジオのコイルを巻いて作って以降、一貫してラジオファンである。年をとると、テレビよりもラジオの方が便利だと思う。内藤副大臣の問題意識をお伺いをして、皆様にしっかり研究していただきたいと思う。テレビには及ばないだろうが、それでもラジオを楽しみにされている方はたくさんいらっしゃるので、どうぞよろしく願います。

(4) 座長挨拶

- 上滝座長より以下のとおり挨拶があった。
 - ・ 私はテレビの番組研究が専門で、ラジオは必ずしも専門ではないが、地域社会とメディアという関係でいえば、1970年代に地方局のローカル報道が拡充した際、全国の地域メディアを取材・調査し、日常的な出来事がニュースとなるという価値基準の転換を経験したことがある。また、私の所属する放送学科にはラジオ志望の学生が多い。今年の卒業論文にも「ラジオとインターネットの連動によるリスナーの獲得」というテーマのものがあった。22歳の若者が今の中高生がラジオを聴かなくなったことにショックを受けたことがこのテーマ設定のきっかけだった。このように若者のラジオ観を身近に感じているので、どこかでお話しできればと思う。この研究会には、ラジオや地域情報、コミュニティメディア、インターネットなどのクリエイター、プロデューサー、研究者にお集まり頂いている。皆さんが実践的、実感的にラジオや地域情報に携わっているので、今後の地域情報メディアの在り方について、望ましい絵が描いていければと思う。
- 上滝座長から、本研究会は資料も含めて原則公開（公開することにより支障が生じる場合は非公開）とすること、並びに資料及び議事要旨を一般の方々アクセスできるように総務省サイトに掲載することが提案され、了承された。

(5) 意見交換

- 各構成員から自己紹介を兼ねて以下のとおり発言を行った。
 - ・ 石井構成員
東京だけの発想で物を考えるのはもうやめよう。ラジオは広告費などの面で大変な状況にあるのは事実だが、むしろチャンスなのではないかという視点で議論がしたい。肉声の温かさ、これはラジオにしかないものだと思う。また、ラジオが大きなメディアではないからできることがある。
 - ・ 伊藤構成員
コミュニティ放送は、お金はない、人はいない。でも、マイナスからのスタートでは知恵が出る。地域との連携も生まれる。地域の思いは大切にしなければな

らない。なぜ、発信するツールが多いこの時代に放送局にこだわるのかと言えば、それは信頼性が高いから。良い形で地域情報メディアの在り方をお話しできたらと思う。

・入江構成員

自身がラジオ局に入社する際、「音声には限りない可能性がある。どんな時代になっても音楽を伝える、声を伝える、肉声を伝える必要性というのは絶対にあるし、テレビにはできないことがあるに違いない。」と考えていた。昔は音楽を聴く際にはラジオに耳を傾けていたものだが、今はインターネット配信で流れてくる。ラジオのデジタル化による可能性について、この機会に考え直したい。

・太田構成員

ラジオは非常に大きな可能性を持っていると思う。もしかしたら広告主はその大きな可能性に気づいていないのかもしれない。インターネットの世界とは違う視聴者の方々の熱量というものをヒントにしながら、新しい地域情報メディアの在り方について皆様と一緒に研究していけたらと思う。

・金山構成員

今回の研究会で、ラジオが築いてきた文化、それは日本のメディアの文化、日本の社会が築いてきた文化でもあると思うが、その文化を再評価できるような議論がしたい。ラジオは人と人をつなぐ、非常に重要な媒体であると感じている。

・芝構成員

阪神淡路大震災当時の各ラジオ局や新聞社等の調査によると、被災者にとってあるいは避難所において、一番はじめに情報を得たメディアはラジオであった。今でもそれは当てはまると思うが、新しいメディアとの組み合わせの可能性も議論していきたい。

・田中構成員

今までは広告料を支払って広告をする「Paidmedia」が中心だったが、インターネットにより、企業がメディア化できるようになってきた。また一般生活者がどんどん情報を発信することによってそれがメディア化してきた。ラジオというメディアが例えばインターネットなどにつながることでどうバリューが出るのかを自分なりの視点で話していけると良いと思っている。

・西田構成員

テレビや雑誌と異なり、ラジオは「早送り」で聴けないメディア。聴き手が、その時間分、送り手の話に耳を傾けなくてはならない分、他のメディアにはない利点があると思う。

・舟橋構成員

地域情報メディアを考えると、技術、社会、文化のどこにも偏ることなく、日本の技術、社会、文化を活かしてシナジーさせることがこれからの可能性を生むと考えている。また、メディアとして、地域と広域の連携も重要と考えている。今後もメディアが担っていく文化は何か、既存のステークホルダーと新しいステークホルダーの皆がラジオに参加することで元気になる形を考えていきたい。

・三浦構成員

学生のとくに深夜のラジオで自分の悩みに直接的に答えてくれるパーソナリティの方に支えられた。自分はリスナーに近い立場から、ラジオの暖かさ、文化を伝えていきたい。

○ 内藤副大臣の研究会開催趣旨や各構成員の自己紹介等を踏まえて以下のとおり意見交換が行われ、以下の発言があった。

- ・放送時間の分だけ聴いていなくてはならないことは、今の時代ではハンデかもしれないが、人の話を聴くことで得られる理解度は非常に高いものがある。ネットや本で知識を得るよりも、理解が深い部分もあるのではないか。
- ・ラジオのコンテンツにはCDなどにして売られているものもある。そういった活かし方も考えられるのではないか。
- ・ラジオにはメタ情報を与えられないメリットがある。情報をインデックス化できない最後のメディアである。
- ・コミュニティ放送では、有名タレントは出せないが、市議会選挙の開票速報がキラコンテンツである。自分の投票した人がどのくらい票を得たのかは地域にとってはとても大事なことである。
- ・火災の情報などの地域に聴かせなければならない情報を聴かせられるメディアとしてラジオは有用である。
- ・人気のラジオ番組であっても、従来の広告の付け方ではスポンサーからお金がかなくなってきた。
- ・新しいメディアを作る際に、新しいジャンルの人々が集められるのは当然だとは考えるが、数十年に渡ってラジオ業界が培ってきたノウハウの蓄積は大切にしたいと考える。
- ・これからもラジオは音声情報だけで良いか。それとも映像などのコンテンツも一緒に送ることができた方が良いか。新たな時代のラジオを考えていきたい。
- ・BS デジタルラジオや見えるラジオの総括を行うことが必要。ラジオは音声だけでイメージーションできるメディアとする考え方もある。
- ・決まった時間に決まった番組を聴くという不自由なメディアというところを売りにしていくのも面白い。
- ・災害時にラジオの省電力性は強みになると思う。ワンセグでは数時間しか電池が持たない。エコメディア、エコ端末という観点で、省電力な電子インクを使用した電子ブックリーダーにラジオを組み込むことなども考えられる。

6 今後のスケジュール

- 第2回会合は、2月26日（金）17：30から開催する。
- 「災害、交通等の地域情報」をテーマに何人かの構成員からプレゼンテーションの予定。

以上